

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 26 年 11 月 19 日	
所属部局・職	霊長類研究所生態保全分野・修士課程学生
氏名	有賀 菜津美

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)	
鹿児島県屋久島、京都大学霊長類研究所	
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)	
屋久島ゲノム実習	
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)	
平成 26 年 10 月 19 日~24 日 (屋久島)、平成 26 年 10 月 27 日~31 日 (ゲノム)	
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)	
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)	
<p>写真 (必ず 1 枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの) の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。</p> <p>PWS 主催の屋久島ゲノム実習に参加した。メンバーは、霊長類研究所から 5 人、アジアアフリカセンターから 1 人とバサボセさんが参加した。今回は前期のように人数が多くないため、コース分けはされておらず、屋久島に入ってからテーマを決めた。2 日目の夜、テーマ決めを行う際に、サルチーム 4 人、オオイタビチーム 3 人に分かれた。このチーム分けは、その後のゲノム実習も同様であった。</p>	
<p>屋久島実習</p> <p>屋久島に到着した日の午後、西部林道沿いを歩き、ニホンザルとシカを見た。ニホンザルは車が止まっても人が近くに寄っても逃げず、グルーミングをする親子やクスノキ (<i>Cinnamomum camphora</i>) を食べる個体を観察することができた。シカは自分の知っているシカよりも小さく、驚いた。その後は西部林道沿いを散策し、ニホンザルが食べる果実や葉 (クスノキ、マテバシイ (<i>Lithocarpus edulis</i>)、イヌビワ (<i>Ficus erecta</i>)、ヒサカキ (<i>Eurya japonica</i>)、アコウ (<i>Ficus superba</i>)、ハゼノキ (<i>Toxicodendron succedaneum</i>)、カラスザンショウ (<i>Zanthoxylum ailanthoides</i>) 等) について知ることができた。夜は、Prof. David A. Hill のおこなっているコウモリの調査を見学させていただいた。実際に設置しているコウモリ捕獲装置を見学した後、その日に捕獲した個体を見ることができた。コテングコウモリ (<i>Murina ussuriensis</i>) とユビナガコウモリ (<i>Rhinolophus ferrumequinum</i>) の 2 種を見たが、想像以上に小さく形態が 2 種間で大きく異なったので驚いた。捕獲した個体は小さな白い巾着に入れておくことで、傷つけることなく糞の採取も可能だと教えていただき、感心した。コウモリの調査風景を見ることはなかなかないので、とても良い機会になった。</p> <p>2 日目は、テーマを決めるために西部林道沿いから少し森に入り、ニホンザルを追った。人によく慣れているということもあり、少人数であれば追うこと自体は難しくないと感じた。午前中はサルを追い、どの程度の行動データが取れるのか、何を食べているのかということを観察した。また、この日は E 群がオオイタビ (<i>Ficus pumila</i>) というイチヂクを食</p>	<p>屋久島実習スケジュール</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 10 月 19 日 (日) 移動 西部林道沿いの散策 コウモリ調査の見学 ● 10 月 20 日 (月) ニホンザルの追跡 ● 10 月 21 日 (火) オオイタビにて観察 (西部林道) ● 10 月 22 日 (水) オオイタビにて観察 (西部林道) ● 10 月 23 日 (木) プレゼンテーション ● 10 月 24 日 (金) 白谷雲水峡 帰路

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

べているところを観察することができた。運よく食べ始めから群れが去るまで見ることができたため、食べ終わった後にサルが食べたオオイタビの残りを拾った。午後は7人でテーマを何にするか話し合いながらステーションに帰った。その晩にサルを追って採食方法を観察し、糞から何を採食しているか調査するサルチームとオオイタビの利用を調査するオオイタビチームに分かれた。私はオオイタビチームに属し、翌日から調査をおこなった。

3日目と4日目は、オオイタビのツルが巻き付いているセンダン(*Melia azedarach*, Meliaceae)の木の下でどのような動物が来るのか、どのように採食をおこなうのかなどの記録をおこなった。また、初日と同じようにオオイタビの果実をサンプルとして拾った。最終日には木になっているものと比較するため、木からもサンプルを採取した。

5日目は、午前中からプレゼンテーションの準備をし、15時からそれぞれのチーム20分ずつ発表をおこなった。内容は面白いものがあったかなと思ったが、英語で躓いた。コミュニケーションを取れることはもちろんだが、もっと英語で書いたりプレゼンしたりできるようにしなければならないと反省した。

最終日は、白谷雲水峡に連れて行っていただき、屋久島の照葉樹林とヤクスギ林を見ることができた。



写真 1-2 子どものグルーミングをする母親ニホンザルとそのすぐそばにいたシカ



写真 3-4 Prof. David A. Hillによるコウモリ調査

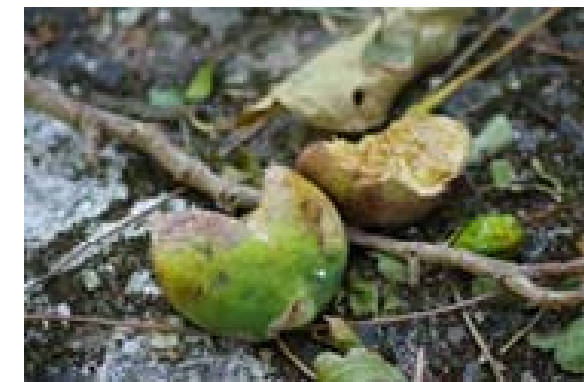


写真 5-6 オオイタビを食べるニホンザルと採食後に残ったもの

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



写真7-8 拾ってきたオオイタビとメジロの食べた跡が残っているオオイタビ



写真9 プレゼンの準備中



写真10 観察場所にて

ゲノム実習

ゲノム実習は、霊長類研究所でおこなわれた。基礎知識は大学の一般講義で習うレベルしか持っておらず、不安だった。しかし、今回のプログラムは実験初心者も多く、基本的なことから教えてもらうことができた。作業は屋久島実習同様、2チームに分かれておこなった。私の属したオオイタビチームは、動物が食べたであろうオオイタビから採取したスワブサンプルとオオイタビの切片サンプルを使用した。サンプル採取時には、唾液からDNAを取るの難しいかもしれないと言われ、ゲノム実習でデータを得られるかとても心配であった。しかし、結果多くのサンプルからニホンザルのDNAを得ることができた(Genbank provided by NCBI)。また、シカのDNAも得られ、自分たちの予想以上のデータを唾液から得られたことが嬉しかった。また、よく調べてみると、シカのDNAが得られたサンプルからはニホンザルらしきDNAの波長も見られ、面白い結果となった。ゲノム実験は経験がなかったので、細かい手順が想像以上に大変だということや結果が得られてからのデータ解析にとっても時間がかかることが分かり、とてもよい経験となった。

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



写真 13-14 実験風景@PRI

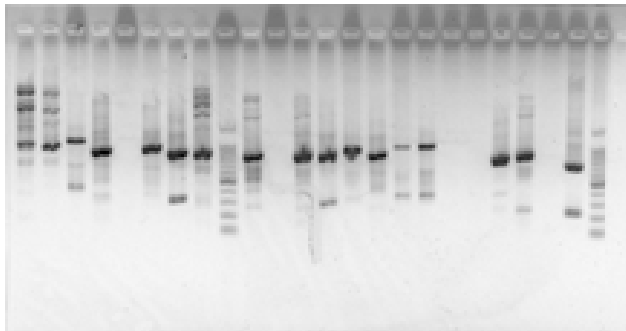


写真 15-16 電気泳動の写真 (C01)、シーケンスの機械

プレゼンテーション

11月6日に、屋久島・ゲノム実習のまとめとして霊長類研究所でプレゼンテーションをおこなった。準備期間も短く、参加者全員で集まって意見を交わすことは難しかったが、2チーム合同で内容を組み立てた。屋久島実習の最終日にも感じたが、英語で意見交換をする難しさと力量のなさを感じた。しかし、今後必ず必要になってくることであり、この段階で感じる事ができて良かったと思った。また、英語で発表することが初めてだったので、とても緊張したが大きなミスもなく、無事に終わったと思っている。しかし、上手なプレゼンだったとは思えなかった。つい英語が不安で、カンペばかり見てしまい、ジェスチャーも少なかったのも、また反省し改善すべき点が見つかった。この経験を今後にも生かしていけたらと思った。

6. その他 (特記事項など)

今回の実習を行うにあたり、素晴らしいプログラムに引率し、ご指導してくださった半谷さま、湯本さま、澤田さまには感謝いたします。本活動は、PWS より助成を得て、おこなないました。ありがとうございました。